

1 図画工作・美術科で願う豊かな学びの姿

本学校園の図画工作・美術科では、「豊かな造形体験をいかし、自分らしい表現を追求する図画工作・美術」として、自分や他者の思いをつかみ、伝え合うかかわり合いの中で、より豊かな表現を追求していく授業づくりに取り組んできた。そこで、幼小中一貫教育における11年間を通してはぐくむ具体的な学びの姿を次のように定義する。

- 体験から感じ取り、体験をいかして自分らしい表現を追求しようとする姿。
- 互いの考えを伝え合い、自分や仲間の表現を発展させようとする姿。

造形活動では、子どもが自分の思いや欲求、願いなどを色や形に表すことをねらいとしている。また、子どもが遊びや造形活動をする過程や、その結果から見付け出した表現のよさや面白さ、表現を支えている取組のよさを見付け出すことをねらっている。そのよさは、会話や文章などの言語活動、時として図や絵、実演などによって伝わり、共有され評価される。

このように、身近な友だちとかかわり合い、学級全体で学び合うことが、子どもの感性を高め、発想や構想に深まりや広がりを与える。そして、造形表現における思考力・判断力・表現力が育成されるものとする。

2 図画工作・美術科における思考力・判断力・表現力とは

「思考力」とは、表現したいことにせまろうとする時、直感的にまたは論理的に言葉や図・イラスト等を使って物事を考える力である。

「判断力」とは、感性を働かせて対象と向き合った時、様々な直感や思考等による発想を通して、自らのイメージを練り、表現することを決定する構想へとつながるものとして働く力である。

「表現力」とは、形や色を通して自分が見たことや感じたこと、表したいことを表す力である。図画工作・美術ではこれまで特に強調されてきた能力であり、教科の特性を強く主張するところである。

思考力・判断力・表現力は図画工作・美術において分断されることなく、一体化し、造形活動の中で自然に働いていく力であるとする。一貫教育における11年間のつながりから思考力・判断力・表現力を次のようにまとめた。

初等部前期	遊びや生活の中で体験しながら、自分の願い、思い、考えを確かにもち、それを表す力。 仲間とともに造形遊びや表現活動をする喜びを味わい、体全体の感覚を働かせて身近な素材や環境にふれ、よさや美しさを素直に感じ取るとともに、自分の願いや考えを自分なりの表し方で伝える力。
初等部後期	所属する集団の中で色や形やイメージを基にして、表したいことについてかかわり合い、自分の考えや意図を明らかにするとともに、仲間の考えなどを取り入れ、自己の造形表現の可能性を広げる力。
中 等 部	自分が集団や社会の一員であるという自覚のもと、集団や社会に働きかけることもできる造形表現の構想をもち、その実現にむけて相互評価を取り入れ、習得した知識や技能を選択しながら造形表現したり、その造形表現を基に発信したりする力。

思考力・判断力・表現力の評価は、「発想・構想の能力」の評価の観点の評価基準によって行っている。評価基準や評価基準は、本学校園が考える「図画工作・美術科における思考力・判断力・表現力」を基盤にして設定している。

具体的には、各題材や小単元ごとに子どものふりかえりや自己評価を行っている。作品から見取ることのできる造形表現の変遷を画像により集積したり、表現主題に沿った発想や構想を図示や言語化したりして集積する。この評価を蓄積することにより、学び合いの中で子どもの思考や判断がどのように変容したのかを評価することができる。授業場面での子どもの気付きに関する言葉や活動の様子からは質的な評価を、また、授業後のふりかえりや評価アンケートからは、より客観的で量的な評価を行っている。

3 思考力・判断力・表現力を育成するために

(1) 学びをいかす

図画工作・美術科において学びをいかすとは、自己実現としての自らの造形表現を展開させ追求する姿に見て取ることができる。

- 体験や他者との交流から表したいことを発展的に見いだすこと。
- 題材を越えて、学んできた知識や技能を活用すること。
- 表現テーマに向かって自己の造形表現を高めること。

例えば、材料を手にした子どもが、互いの見立てを伝え合う中で、それまでになかったイメージに気付いたり、加工する方法についてよりよい方法を教え合ったりする姿がある。また、子どもが以前に使った端切れのよさを思い出し、表したいことに使えるかどうかを試すために、包んだりつないだりする姿がある。他には、作りたい作品の漠然とした完成イメージを、上記のような取組から具現化し実現させようとする姿がある。

(2) 学び合い

○ 個と集団をつなぐ学び合い

新学習指導要領で述べられている「言語活動の充実(相互に評価、論述すること)」は図画工作・美術においても大事にしたい。造形体験や試行錯誤の活動から見いだされた一人一人の考えや追求の仕方を、学級全体の場に出し合い、共通の視点に基づいてその造形表現のよさや追求の仕方のよさを学び合う。個人思考と集団思考をつなぐ教師のはたらきかけにより、学級全体の学び合いを豊かにする(図1)。

個人思考の視点では、周囲の環境などの「場」や素材などの「もの」とのかかわり合いを通して、更に、自ら体験し、習得してきた知識や技能、または、表現テーマなどの「こと」とのつながりの中で、思考力・判断力・表現力は培われていく。集団思考の視点では、他者の表現活動やそれによる造形物とのかかわり合いの中で、発見や気づきを新たに獲得し、さらに創造性豊かな表現を求めていく。他者との深いかかわり合いの中で獲得される経験は造形表現にも大きな影響を与える。言語活動を伴う友だちとのコミュニケーションなどは、他者の経験を追体験したり、新たな気づきを獲得できたりするという点で有効である。

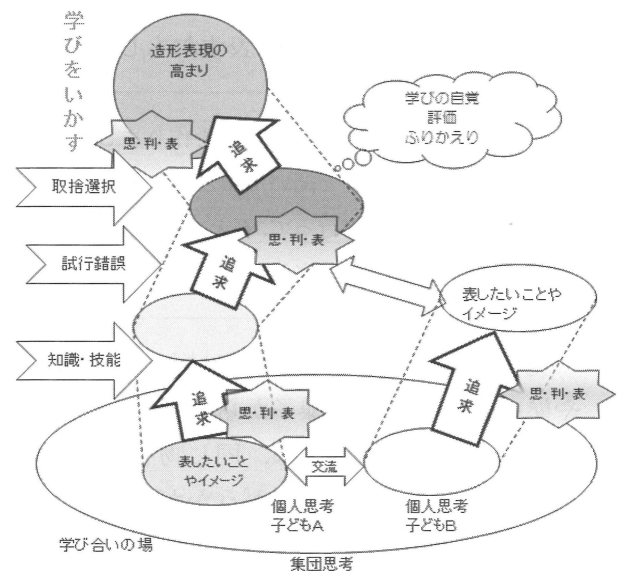


図1

(3) 教師のはたらきかけ

教師のはたらきかけを行う時、その意図として学習活動の中に次のことを明確に位置付けて展開させていく。

- 体験から感じ取ったことを表現すること。
- 課題について構想を立て、実践し、評価・改善すること。
- 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させること。

授業の中で、相手に自分の考えを伝えるという活動を充実させていくことにより、子どもは自ずと自身の製作意図が明らかになり、新たな表現の可能性を発見するに至ると考える。教師は子どもの学びの姿や子どもの学びを詳細にとらえ、授業を改善する。そこで、「掘り下げる」または「提案する」はたらきかけに反映させることにより、子どもの必要感に応じて手立てを講じることができると考える。学び合いにおいても論点を整理し、新たな発想や構想につなげやすいはたらきかけができると考える。

そのために、教師が子どもの学びをより深くとらえるということ、すなわち、子どもの考えが生まれる根拠や理由を明らかにし、つかみ取ることが重要である。子ども自らが学びを「拓き」、より豊かな造形表現に迫る学習活動を展開させる「ねらい」にも有効に働くと考える。(文責 三桐 摂夫)

【参考文献等】

- ・『言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～22.12』文部科学省、2010
- ・『評価方法等の工夫改善のための参考資料23.3』国立教育政策研究所教育課程研究センター、2011